

おきなわ環境ネット

— 沖縄環境ネットワーク 通信 —
第 5 号

目次

巻頭 科学者・審議会・役所

伊藤嘉昭

沖縄環境ネットワークニュース

検証レポート '98

①赤土問題 「とまらない赤土流出」

平良 克之 (沖縄・山ばる・海)

②干潟 「与根干潟の最後」

名和 純 (琉球湿地研究グループ)

活動報告

ユース・エコロジー・ギャザリング '98 沖縄大会参加報告

宜野座 由子 (沖縄ギャザリング実行委員会)

小林 芽里 (前 全国青年環境連盟副代表)

会員から 「人と話しをすること」

小川道夫

新聞記事から

沖縄環境ネットワーク 1997 年度の主な活動と収支状況

環境情報おきなわ

巻頭 科学者・審議会・役所

伊藤 嘉昭

一生態学者として沖縄で白保や山原 (やんばる) の自然を守る動きに加わり、また宇井先生の水を守るたたかいを見て、いるなかで痛感したのは、国や県の役所が何かの問題で審議会を作るときの、学者委員の人達の在り方である。行政のいうことを聞く学者ばかりを集めようとしているとしか思えないことが多いのだ。

もっともこれは沖縄だけではない。国も、日本中の都道府県庁のほとんどすべて、市役所なども、そうなのである。神戸で、開発優先型の人々が大部分の工学部にいながら、市の乱開発により起るであろう危険を警告し続けてきた早川神戸大学教授は震災後の何の審議会にも入れられず、この市の姿勢が小田実さんが「これが国か!」と叫んだような、今も続く被災者の苦しみを作り出した。その一方

で、震災で大儲けした建設企業 (元来彼らのいい加減な工事こそ高速道路の大倒壊などのもとだったのに) がたくさんあるのだ。

ただ沖縄の場合は、この一般的傾向に加えて、沖縄が他県から離れすぎているために (たぶん審議会開催旅費が高くなるため)、ほとんどの学者委員が琉球大学一校の教授、元教授で占められているという事情があり、これが事態を一層悪くしている。県の行政側も大部分の人が同じ大学の卒業生だとなると、激しい議論はよほど決心しないとできない。

昨年春の県のある審議会 (座長は生物学者だった) で、自然保護を目指す学者や団体が要望し続けてきた、山原の鳥獣保護区の拡大が「必用なし」ということになったと聞く。最近この座長が米軍

ヘリポート建設予定地のジュゴンについて発言し、ジュゴンを守れと言ったと新聞に出ていたが、この一貫しない姿勢はどちらも県知事の意向に沿ったものではなかったか、と考えたくなってしまう。

行政側は、こういう委員の選び方で行政計画がうまく進行して良いと思うかもしれない。しかし長い目で見ると行政側にちっとも良くないのである。批判者も含めて討議を重ねることにより、たとえ悪い計画の方が採択されても最悪の状況は防がれ、また訂正もしやすいのである。

日本で役所と大企業とが作り出してきた公害を摘発・批判してきた宇井さんは、東大時代以来文部省科学研究費を全く受けられなかったそうである。もちろん通産省、厚生省など他の省の研究費もくはずがない。ところが氏は、国連機関WHO（世界保健機構）の研究費をもらっていた。自らの医学的知識を水俣病の実態解明に捧げた熊本大学の前田正純さん（有機水銀汚染を表わす英語がMinamata diseaseとなるなかで、氏の名前を知らぬ国外の公害研究者はいない）は、アメリカの、日本で言えば厚生省にあたる部局を持つ巨大な研究財団NIHの研究費をもらっていた。

WHOやアメリカ政府はこの時期に宇井さんや前田さんの考えに賛成したわけではない。しかし、こういう人も取り込むことによって、将来万一の変化が起きても対応できるようにしているのである。利口なことだ。

拙著『沖縄やんばるの森』（岩波書店）のなかで私は、これをあらためる方法は、日本の国や自治体が、アメリカなどでよく行われているように、審議会委員の人事選を関係学会に依頼することだと言った。学会の全てが良いわけではなく、医学などにはまったく政治家のチョウチン持ちのような学者ばかりが支配しているところもあるが、ほぼすべての自然系学会は評議員、会長は会員の選挙で選ばれるので、改善の道があるのである。日本でも少数だが例がある。屋久島の自然保護をめぐるある委員会、日本植物学会、

日本動物学会、日本生態学会に委員の推薦を依頼した。しかしこれは例外だ。例外となる原因は、日本の役人に「学会」というものの正しい見方が欠けていることによる。

私はかつてアメリカがベトナム枯葉作戦に反対する日本生態学者の運動の事務局局長役をしていた。使われた農薬2・4・5-Tにダイオキシンという猛毒の不純物が含まれていることがわかり、1972年4月、日本生態学会大会は枯葉作戦中止要請を決議した。翌日の夕方、私のところにアメリカ大使館から電報が届いた。内容は弁解であったが、とにかくアメリカ政府は学会の決議を重視したのである。これに対し、同時に林野庁への2・4・5-T使用中止も決議されたのに林野庁あるいは農林省の反応はなく、文書を送った後も回答さえなかった（日本での使用中止は、米軍の使用中止の一年後であった）

私は沖縄だけでなく、日本中の役所が、行政審査のための審議会を自分達の言うことを聞く「学者」でかためるやり方をやめ、関連学会に委員推薦を依頼するようにすべきだと提言したい。そして議事録は公開し、また委員が会議の内容について外で喋ること、書くことを承認すべきである。さらに沖縄の場合には、委員の中に他県の学者・専門家を含めるようにすべきである（学会推薦ならこうなる可能性が大きい）。他県の学者の方が質が良いなどと言っているのではない。方針立案者とまるで関係のない人も入ることによって、討議はずっと活発に行なわれるようになるだろうし、また日本中からこれはという人を探すこともできる。委員の選び方（学会推薦かどうか）はともかくとして、後者については他県ではよくあることも言っておきたい。屋久島が世界遺産になったとき、鹿児島県が作った屋久島環境文化懇談会のメンバーには（もちろん鹿児島の大学の人も入っていたが）、京都大学名誉教授3人、千葉県立博物館館長、C.W.ニコル、兼高かおるが入り、委員長は東京女子大学の教授であった。

1. 「平成10年度地球環境基金助成金事業」からぶり

前号でお知らせした土壌汚染問題市民ネットワーク事業の環境事業団助成金応募は、不採択となりました。

選考審査会では、活動内容は評価されたものの、助成金を受ける組織体制が確立されていないと判断され、基地跡地利用における土壌汚染の問題については、別の角度からの活動を考えてみませんか。

2. 「沖縄の米軍基地による低周波音公害」調査費助成内定

(財)消費生活研究所の「持続可能な社会と地球環境のための研究助成」に応募した「沖縄の米軍基地による低周波音公害」の調査費助成が内定しました。

3. 「会員名簿作成中」

会員同士の情報交換に便利な会員名簿を作成しています。今号と共にお届けする予定でしたが、次号に延期します。返信のアンケートを出し忘れていた方は、早く出して下さい。

4. 「合併浄化槽普及研究会プログラム」決定！

*時間：午後2時～4時

*場所：沖縄大学 II号館 308 教室

参加費：500円 (資料代別)

第1回 4月18日(土)

「日本の風土と水処理

～排除から利用へ～」

宇井 純 (沖縄大学・沖縄環境ネットワーク世話人)

第2回 5月9日(土)

「中城湾南部流域下水道計画の問題点
～財政と事業効果、環境の視点から～」

与那嶺 義雄 (西原町議会議員)

第3回 5月16日(土)

「コミュニティプラントの課題と雨水利用～建築家としての取り組みと姿勢～」

末吉 栄三 (末吉栄三計画研究室)

第4回 5月30日(土)

「生活排水処理政策の県内の事例
～合併浄化槽設置普及の試み～」

新里 清次 (宜野座村福祉課)

岸本 健 (名護市環境衛生課)

辺野喜 英之 (那覇市環境公害課)

第5回 6月13日(土)

「家庭用合併浄化槽の実践事例
～生活排水は涸れない水資源～」

中農 一也 (自治体職員)

島福 善弘 (自治体職員)

第6回 6月27日(土)

「合併浄化槽を推進する二ツ井町の経験
～みどりあふれる環境の維持をめざして～」

丸岡一直 (秋田県二ツ井町町長)

[第6回のみ、場所は沖縄大学 I号館 501 教室]

通信欄から会員の声

同業の後輩から色々沖縄について伺っております。栃木は相変わらずです。今でもセッセと箱を作り、道路を掘り返しております。ゴミ分別収集(7分別が始まりましたが、ダイオキシン対策なし、電池も放棄されても可。ダイオキシン、ゴミの様々なリサイクルについては予算が

ないので未だ逃げ回っております。)や浄化した水を上流にポンプアップして再利用(放流を含む)することは考えていないようです。現在、道路と箱で膨大な借金財政のはずです。

[栃木市 M.O さん]

とまらない赤土流出

平良 克之（沖縄・山ばる・海）

去る2月に沖縄県、環境庁、建設省、農水省、林野庁合同による第3回赤土流出等防止対策委員会（最終）を沖縄・山ばる・海は傍聴する機会を得た。委員会での議論、報告書（案）を見るや、本会では早速、現場検証を実施することにした。折しも2月は雨の多い時期である。まさにグッドタイミングだ。3月15日（日）、マイクロバスに乗り、20人が那覇を出発した。やんばるの辺野喜ダム周辺の治山・治水ダムの現状、土地改良地の作付け、赤土対策の現状、奥・与那林道（大国林道北進線）による自然の改変の現状にポイントを絞って検証してみた。

我々は委員会案の赤土等流出防止対策のイメージ図をしっかりと頭にたたき込み、この問題点を探し出すべく意気揚々と出陣したのであった。この様子をNHKが取材同行し、翌日放映され、県庁は混乱の様相を呈していたらしい（NHKに問い合わせが殺到した）。

1. 治山・砂防ダム

我々はダム周辺の沢に建設されたばかりの2基の砂防ダムを見つけた。同じ沢に上流と下流に作られていた。下流の砂防ダムはまだ土砂で埋まっていなかったが、自然に配慮されていない建造物であることは一目瞭然であった。ここはノグチゲラ、ヤンバルクイナなどの希少生物の棲む沢である。やんばるの自然やそこに棲む生きものの生命線は脊梁山地から流れ出す無数の小さな沢である。沢から集まる水が大きな流れをつくる。沢筋は生きものたちの生活の場である。ノグチゲラは本能的に沢筋の傾いた古木に営巣する。ヤンバルクイナも沢が生活の場で、天然記念物に指定された多くのカエル類は沢筋を下ったり、産卵期には本能的に上流に移動する習性があるという。自然環境に配慮されない砂防ダム、林道は生きものの生命線を分断し、そこで立往生

している生きものをよく見かける。そこからさらに上流に行くと林道が建設され、その下の沢に新たな砂防ダムが建設されていた。ここは建設され、その下の沢に新たな砂防ダムが建設されていた。ここは建設されて2ヶ月もたたないが、すでに半分は埋まっていた。ここに、本当に砂防ダムは必要なのだろうか。わざわざ沢を掘り込んで、周辺を削り、残土を周辺に積んでいた。2月の雨で剥き出しになった法面から土砂が流れ溢れ出さんばかりであった。砂防ダムは赤土流出問題の根本的な解決策にはならず、むしろダムの建設は新たな土砂流出を引き起こし、更に新たな砂防ダムを必要とする。このままでは、無数の砂防ダムが作れられ続けるだろう。

2. 土地改良区

次に一行はやんばるの山頂に作られた土地改良区に着いた。この50ヘクタールほどの改良区は当初、サトウキビが主作物であったが、実は北部では年々サトウキビ生産は減少し、農業人口も減少し、高齢化が進んでいる。この地区も農業振興、赤土対策の面から問題を抱えていた。まずサトウキビは少ない。キャベツが栽培されていたが放置され商品にはならない。観葉植物が栽培されていたがこれも商品価値がなく放置されている。今年1月に広大な畑地にミカンの苗を植え付けていた。これなら管理の必要はない。ここは以前、菊の栽培をしていたが失敗している。この山頂の改良区は常に強い風雨にさらされ、赤土が斜面を川のように流れ下る。そして、やんばる特有の国頭マーヅそのものに土壤改良がなされておらず、赤土に直にサトウキビ、その他の作付けをしている。無計画な栽培だと読谷村のある農家の人が指摘していた。マルチングもなく赤土むきだしである。赤土は斜面に沿って流れっぱなしで、沈殿

池はつまり、あふれている。この山頂の大規模な改良地では栽培条件、沈殿池、土砂溜、排水路にいたるまで問題を抱えている。周辺植生はなされているが、どれほど役に立つのだろうか。

3. 法面保護

土地改良区周辺、林道周辺の法面、砂防ダムの法面を見て回ったが、2月の雨で法面は大崩落していた。やんばるの国頭マージは砂岩でれき層をなし、粒子は細かく風化し赤い。その土質は硬く、その上にわずか数センチの表土が乗っかり、イタジイを中心とする木々は這うように薄い表土に広がっていく。山肌がいったん露出すると、表土にしがみついているような根では山を支えることはできない。抜け落ちていくように崩れるのが特徴で、そのさらさらした微粒子は赤土流出として川や海を汚染することになる。やんばるの自然条件を無視した砂防ダム、林道は半永久的に法面崩壊をもたらし、その復旧に費やされる税金は重く県民にのしかかるだろう。

4. 結論

環境庁の対策イメージ図を頭に入れ、検証して回ってきたが、委員会案は目新しいものではなく、従来やってきたことの焼き直しにすぎない。調整費50億円の中から6千万円をかけてきただけのものだろうか。本会はこの案の不十分さを指摘し、行政にボールを投げ返す。もっと真剣に行政は問題解決に取り組むべきであろう。観光客は年間300万人を超えたが、水を供給するこれ以上のダム建設は困難だろう。水問題も赤土問題と同じだ。

5. 沖縄・山ばる・海

自然保護に取り組む人は純粋で良い人ばかりだ。本会も純粋な人ばかりだ（自画自讃か）。ゆったりとした、拘束されない集合体で、それぞれのびのび活動している。運動は気楽に、楽しまないと長続きしない。しかし本会の本島北部の林道建設、土地改良区について、県・国を相手に本格的な訴訟を続けている。

*関連記事を10～11ページに掲載

与根干潟の最後

琉球湿地研究グループ

名和 純

今、沖縄から干潟が失われようとしています。島のあちこちで大型公共事業による干潟の埋め立てが急激に進みつつあるからです。そのなかでも大規模なのが、与根干潟の埋め立てです。沖縄島で最大といわれた糸満から豊見城村地先にかけての広大な干潟は、1970年代から80年代にその半分以上が埋め立てられてしまいました。そして、最後に残された与根干潟（豊見城村翁長から与根地先）も、現在行われている豊見城村地先開発事業による埋め立てで、そのほとんどすべてが失われることになりました（埋立面積 160 ha）。

与根干潟は報得川や保栄茂川が運んでくる砂泥の堆積によって6000年くらい前から少しずつ形成されてきたといわれています。かつてこの一帯に暮らす人々にとっ

て、干潟は最も安全でたやすく食糧の得られる場所だったはずです。与根干潟の後背地で発見された阿波根貝塚からは、アラスジケマンガイやオキシジミなどの干潟性の貝類が多量に出土しています。こうした人と干潟とのかかわりは、現在まで連綿と続けられてきたのです。

今でも干潮時に与根干潟へ行くと、オキシジミなどの二枚貝を採る人が決まって5、6人は見られるはずです。なかには1人で5kg以上採っていく人もいます。こうした潮干狩りの楽しみは、もう次代に受け継がれることはありません。豊見城村最後にして最大の自然空間である与根干潟は、まもなく永久に封印されてしまうのです。そのまえに、与根干潟に遊びに行ってみませんか。満潮時には、100羽近いホシハ

ジロ（海ガモ）の群れを見ることができるでしょう。運がよければ、世界で500羽しかいないクロツラヘラサギやツクシガモを見ることができるかもしれません。干潮時には、潮干狩りを楽しむことができます。さあ、みんなで与根干潟に行こう。

クロツラヘラサギ

トキ科の渡り鳥。世界で500羽しか確認されておらず、干潟に来る野鳥のなかで最も絶滅の心配される種。今年は与根干潟に7～9羽が渡来している。

ツクシガモ

白い美しいカモで絶滅の恐れのある危急種。現在、与根干潟に少なくとも3羽が渡来。

オキシジミ

6cm くらいの丸い二枚貝でとても美味。琉球

列島では沖縄島の干潟にのみ生息する。与根干潟はオキシジミの一大産地で、最近まで那覇の市場などに出されていた。



与根干潟（1997）

活動報告

ユース・エコロジー・ギャザリング '98 沖縄大会（沖縄ギャザリング）参加報告

沖縄ギャザリングを体験して

宜野座由子（沖縄ギャザリング実行委員会）

沖縄ギャザリングは、沖縄のことを本土の青年に伝えたいという思いと、本土の青年からの観光コースではない沖縄を知りたいという思いが強く重なって実現した。初めは私と山口智子の二人で始めた企画であったが、友達や環境問題に取り組んでいる青年を集め、約10名の実行委員は半年にわたって準備してきた。

ギャザリングの内容は、環境、基地、平和、文化、自然など沖縄を広く浅く知ることができるものにした。なぜなら、沖縄は日本の縮図と言われているように日本がよく見えるところであるし、何度も沖縄に来てほしいと思ったからである。

実際ギャザリングを体験して、とてもたくさんのものを得ることができた。まず準備の過程で、環境問題を考え取り組む沖縄の仲間に出会うことができた。そして、ギャザリングにおいては、全国から集まったパワフルな青年達と出会うことができた。日本の将来を真剣に考え、その改善のための行動をし、かつ楽しん

でやっている彼らとの出会いは、沖縄ではめったに体験できなかったし、とても刺激になった。また、本土の青年とともに沖縄の問題を学ぶことは、私達が当たり前だと思っていた沖縄の現実に疑問が投げかけられ、広い基地や青い海が特別な存在であることを再認識させられた。

今回最も良い経験になったのは、記者会見をしたことであつた。公の場で意見を表明したのは初めてであり、自分の意見をマスコミを通して表現する手段があることを知った。

沖縄にいる私たちの今後の課題は、沖縄を愛し続け、様々な問題を本気で考え、その実現のために行動し、そして青年としての意見を積極的に言っていくことだと思う。

沖縄ギャザリングに参加して

小林芽里

（前 全国青年環境連盟副代表、静岡在住）

●沖縄初のギャザリング開催

3月14日～17日、全国青年環境連盟（エコリーグ）主催の「沖縄 Youth

Ecology Gethering'98」が開かれた。“ギャザリング”とは環境問題を考える青年が交流する場で、年数回各地で開催されている。今回は琉球大学の山口さんと宜野座さんが開催に名乗りをあげ、初の沖縄開催となった。

全国各地から約 70 人の学生・社会人が集ったが、沖縄は初めての人が多かった。

初日は糸満青年の家にて宇井純先生、玉名覇靖さんの講演、2 日目は佐喜眞美術館、クラハビーチ、大國林道を見学しながらヤンバルの琉球大学演習林施設へ向かい、夜は砂川かおりさんの「基地と環境問題」、高橋宏明さんの「海」などの分科会が行われた。3 日目は班別に分かれて、基地やゴルフ場計画地の見学、照葉樹林散策を行ない、4 日目に名護のヘリポート予定地を見て那覇で解散、という日程だった。

●トロピカル・パラダイスの現実

私は沖縄戦のことは本などで知っているつもりだったが、佐喜眞美術館での丸木夫妻の絵と館長の話は、平和ボケした頭にガツンとくる衝撃で、沖縄島の歴史の重さと島人のこだわりの深さを改めて認識させられた。

米軍基地については宮城邦枝さんの解説で、海兵隊のことやキャンプ名の由来、基地の中と外の交通規則…など「基地を沖縄に押し付けている」側として初めて知ることばかり。日曜日は真上を飛ぶ戦闘機の轟音がなくて“軍隊のいる日常”は実感できなかったが、フェンスの穴には警備のずぼらさにびっくり。皮肉にも基地があるため市民運動がさかんであることは、うらやましくも感じた。

また、本土資本のチェーン店やコンビニが普及して本土化が進んでいることには、沖縄の独自性が減ったようでちょっと寂しかった。

●環境問題と平和の問題

「基地と環境」の分科会で、砂川さんは「平和問題をやっている人に軍事基地

からもたらされる環境問題について話をすると、とてもよく理解してもらえるのに、環境問題をやっている人に軍事基地からもたらされる環境問題について話をしても理解されにくい」という。たしかに環境問題に関心のある青年でも“反対運動”に対する抵抗感からか政治的な議論を避ける傾向があるが、今回基地や平和の問題を実際に目の当たりにして、いろいろ感じた人も多かったはず。「記者会見して県に意見表明してみない？」という砂川さんの提案に、やってみよう！という声があがり、にわかに意見書づくりに取り組むことになった。

●見よう、そして、伝えよう

意見書づくりでは、まず「なぜ沖縄で開催したのか」「沖縄に来て感じたこと」を問い直した。実行委員からは「全国の元気な青年の姿を沖縄の学生に見せたい」「沖縄が好きだから見てほしい」といった意見がでた。参加者からは「南国のイメージと同時に、基地や自然破壊におどろいた」「実際に見ることで基地問題が実感できた」「地元の同世代の声がきけた」「沖縄にはいろんな問題が凝縮されていてわかりやすい」と“百聞は一見にしかず！”という声が多かった。

そこから「実際に見る、現場を知る」「伝える、交流する」という行動計画が生まれた。沖縄で感じたことや意見交換したことを、地元や大学や家庭で伝えていこう。表現方法は多様でいい。という話から、聴覚障害者へも伝えたい！と記者会見には手話もついた。

●自分の地元から、沖縄へ！

では、今何ができるのか、何が必要なのか？という議論では「沖縄の特殊性から日本全体の普遍性へ問題意識を広げよう」「沖縄で得た視点を地元を持って帰り、足元の環境問題に取り組んでいきたい」という意見が出た。沖縄をとおして自分の地元を問いなおす。そうやって各地で行動することが、まわりめぐって沖縄そして日本を動かすことにつながる、とい

う認識が共有できたのは嬉しかった。

しかし「行政に要望する」ことには抵抗があり「個人の努力で社会を変えればいい」的な意見も出た。個人的には公共事業の再考や自立経済への努力などの要求も盛り込みたかったが、数日の滞在ではよくわからないという意見が大半で、抽象的表現にとどまった。

●沖縄からの一歩

深夜におよぶ議論の末に「沖縄宣言」が完成した。県庁の広報課で知事に渡すように頼み、27人で記者会見。翌日の沖縄の地元の新聞2紙に掲載された。意見

書というより「青年からの提言」色が濃く、内容もつたないものだが、「沖縄に集った意味」を問い直し、社会に対して意思表示することができたのは参加者にとって大きな収穫だったし、いつものギャザリングとは一味違うものとなった。

数日間の滞在ではあったけれど、沖縄での体験がそれぞれの活動の新たな起点となると共に、沖縄もがんばれ、本土でも各地で取り組むぞ！というメッセージが多くの人に伝わることを願っている。

*関連記事を9～10ページに掲載

会員から

人と話しをすること

小川道夫

ぎらぎらがつんと照りつける強烈な陽射しも、頭上を覆い尽くしたヤシの葉っぱに遮られて地表までは届かない。鬱蒼とした熱帯の森の中は、海上とは違った暑さ、一ねっとりとした木々の植物の体臭みたいなもので満たされている。その中を、自動車が一台通れるくらいの幅で未舗装の道が通っている。この道がこの島の幹線道であるけれども、そこを通るのは主に徒歩の人間と犬で、自動車は滅多に通らない。自動車は島に5、6台あるだろうか。

この道を歩いている時、それは、職場からの帰りであったり、あるいは波止場で泳いだ帰り、州都のある島に出かけて、この島に戻り、家に戻る時など、道端や森の中で遊んでいる子ども達や、すれ違う大人達から声かけられる。「オガワー、カー フィット イア？」「アグリ」「カポ フィンノ イア」「ネイム」(おがわー、どこいつてきた？ 農場だ。どこいくんだ？ 家だ)。道すがらの人々と、何度も何度も同じやり取りを繰り返してやっと家に着く。家に帰ったら、今度は家の人からまた同じことを聞かれて、さらに細々としたことを聞かれる。州都モエンから戻った時は、モエンでは何をしたか？ ビールは飲んだか？* 何本飲

んだ？ 寝たのは1人か？ そうじゃないだろ？ 日本人か？ 名前は何だ？ とインタビューは延々と続く(*この島は条例で禁酒)。実はこれはインタビューではない。いつでもどこにでもある普通の会話だ。電気も水道もないこの島では、最も普遍的な娯楽は人とのおしゃべりだ。次いで歌ったり、踊ったり。隣の島に行き来したらきつとおもしろいものを見たり聞いたりやったりしたに違いない、ひとつそいつを聞いて楽しもうということだ。後でわかったことだけでも僕の場合は、それにもうひとつ、言葉の練習も兼ねていたようだ。ここの人達は、赤ちゃんにしきりに声をかけて育てる。始めのうちは言葉もなかった赤ちゃんだけど、ある時期が来ると、堰を切ったように話し出す。僕もその言葉はぜんぜん知らずに飛び込んだから、まったく赤ん坊と同じだ。村の人達はしきりに声をかけてくる。最初のうちはへどもどしていたけど段々と言葉を覚えてくるうちに、簡単な受け答えができるようになると、相手は喜んで、その次にはまたちょっと難しい問いかけをしてくる。はじめのうち、この人々との付き合いをとってもうるさく感じていた。逃げ出すように州都の島に行くことも度々あった。しかし、木が

なく、自動車が多く、ごみごみとしてほこりっぽい州都に2日もいると静かな自分の村が恋しくなってくる。そしてまた村で子どものように生活する。(しかしまた逃げ出しては戻るを3ヶ月繰り返した。)

日本に戻って来て驚いたことは、人々がミクロネシアで経験して来たことを興味をもって聞こうとした人が、ほとんどいないことだ。帰国当時、僕が話せることはそれくらいしかないわけだから、人々の対話を日常としていた僕には、この対話の断絶により精神的に大きな打撃を受けた。ミクロネシアでは、いつでもどこでも誰とでもおしゃべりをしていたのに、日本ではほとんど話ができない。ここでもまた赤ん坊に戻ったのかとも思ったが、僕は日本語をかなりよく話すことができる。ではどうしたことか?

日本の人々の会話というのは、何々を知っているか? に始まり、そのことについてどれだけ知識があるかを、話している相手と競いあうためのものが多いようだ。会話の目的は、その話者と聴者の知識の大小で優劣を競うことが目的と見受けられる。その知識というのは、テレビ、雑誌、新聞などのマスメディアに

よってもたらされるものに端を発しており、対話の中の競争の勝敗は、どれだけ話題の事柄に関して情報を得たかによって決まる。その中でも、一般的に知られていない情報いわゆる特ダネはポイントが高い。こう考えると、日本の人々が僕にミクロネシアについて話をしようとし、聞こうとしない理由が見えてくる。2年間、実際にそこに住んで生活して来た人とは、ミクロネシアに関しては知識があまりにも違うので、やる前から負けが見えているために無駄な勝負は挑まないというわけだ。

会話、対話というのは、知識の多さを競いあうことよりも、話している人が、その人自身の目線で見たこと、感覚で感じたことを、その人なりの言葉で伝えるのがおもしろい。聞く人が、その内容をその人なりに理解できるように、質問したり意見したりすることによって、会話、対話の中身も深まっていく。話題は、ブラウン管や活字になった鮮度の落ちたものよりも、生のものが一番刺激적でおもしろいのはもちろんだが、直接の経験者を通して語られる‘話し’は経験者の個性というスパイスが効くと一段と刺激的なものになる。

新聞記事から

基地や環境破壊視察

全国エコ・リリーグ・沖縄宣言を知事に

98.3.18
5/14/24

基地や環境問題など、沖縄の若者のグループが最終日の十七日、行政への要望や全国のエコ・リリーグの青年たちへのアピールをまとめた沖縄宣言を大田昌秀知事あてに提出した。その後、県庁記者クラブで会見し、多くの青年たちが沖縄や日本の問題を直視し、自分たちの国の在り方を考えてほしい」などと呼び掛けた。一行は、青年らで構成する全国的なネットワーク組織、全国青年環境連盟(エコ・リリーグ)が主催した沖縄ギャザリング98のメンバーたち。大学生を

中心とした県外参加者七十八人を含む百人余で、南部戦跡や国頭村の大国林道、名護市の海上ヘリ基地建設予定地などを視察したほか、各地で交流を深めた。四日間の日程を終えた参加者たちは「明るい南国・沖縄のイメージと、基地を抱え、赤土汚染などで環境破壊が進む現実の落差にショックを受けた」「今回、沖縄を見て、感じたことを地元に戻ってほしい」との若者にも伝えていきたい」などの感想を話していた。



沖縄宣言を発表した後、沖縄視察の感想を話すメンバーたち＝県庁記者クラブ



環境行政に若者の意見を

沖縄の交流
集会に参加

98.3.20
琉球新報

大学生の立場で山口県宇部市の環境審議会専門委員を務める、市の地域環境計画策定にかかってくる中で同市在住の大月傑さん(山口大学三年)がこのほど、沖縄での青年環境交流集会「ユース・エコロジ・キヤザリ」に88沖縄大会に参加のため来県した。行政の審議会専門委員を大学生が務めているのは全国的に珍らしい。大月さんは行政による環境施策の意思決定に

の過程で「市民や未来世代の声を聞く努力が必要だ」として審議会の積極公開な提案している。

大月さんは宇部市の環境審議会に市民参加公募で選ばれた。企業代表から反論も出

した一年間について「委員に委嘱された当初は計画を白紙の状態から作れると聞いていた。しかし実際は行政側と民間コンサルタント会社が作った計画案に意見を付すという形で審議会が進められ、幻滅した面もある」と振り返る。

その一方で「二十人の委員のうち最も発言したのは私。企業代表から反論も出

先日、赤土流出防止委員会、今後沖縄県が持っている豊かな自然環境を生かしつつ、持続可能な発展を遂げていくための関係者おおよそ沖縄県が一体となって取り組むとしている。対策として、まず発生源対策を中心に実施することが望ましいという議論であったはず。

現在、赤土流出の半分近くが既存の農地からであり、土地改良事業が終了すればそのほとんどが既存農地からのものになる。それはパイン畑から

配を3%にすると、浸食が始まるのは十二月上旬。このようにおのずと畑の広さや形には枠がある。



仲西 美佐子

環境庁の赤土流出対策に思う

保全型農業への転換を図れ

法になつてゐるため、排水を素早くするよう配が必要である。人力、畜力、機械と拡大した農地に雨量で制限

経済優先、高度利用、省力化、機械化、大型化が近代化であり、このような生態系を壊し環境をト化した。同じように個人の自由を最大限に

効率と利便性の追求の結果、市街地は全面コンクリート、アスファルト化してゐる。同じように個人の自由を最大限に

発揮して豊かになりたいと思う農村に納得のいく方策を提示していくべきだと思ふ。と同時に街も今までの過ちを改め、保全型の土地利用にして住

み良い生活環境をつくる。それが豊かさだけをおう歌してきた者の役目とも言える。

市民もわが身をかんがみて環境保全、赤土流出対策をとるに考えてほしい。森林、畑地、草地、湿地、干潟などの保全をすることは、自由や利益が制限され努力も要することを認識してほしい。

今や豊かな自然環境を生かしつつ、持続可能な発展を遂げるための赤土流出対策は、保全型農業にするしかない。近代農業を問い直し、環境保全型農業を育てる時代になったのではないだろうか。畦や緑地帯などの利用率低下を維持管理費として支払い、有機物投入、等高線栽培や畑の小ささに比例して助成金を出すなど、保全のための努力を評価すべきである。砂防ダムのように生態系を壊し、効果のはっきりしないものに膨大な費用をかけるのをやめ、ヨーロッパのように生態系を守る保全型農業に費用を使うべきだと思ふ。

(恩納村恩納六四九四、農業)投稿

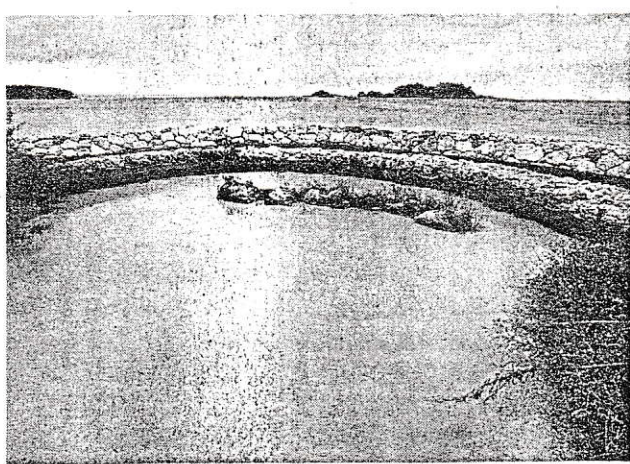
環境庁の赤土流出 防止対策に注文

真喜志 好一

先日、赤土流出等対策検討委員会が開かれた。一九九八年九月に計上された沖縄特別振興対策調整費五十億円から六千万円を環境庁が得てマニュアルを作るといふ。環境庁が主催し、農林省、建設省、林野庁それに沖縄総合事務局、沖縄県も加わっている。それだけに抜本的な対策が検討されるものと期待して傍聴したが、素案のひと言に過ぎた。

◇

赤土防止対策は山から海へ、海から山への生命の循環を知り、次に赤土の粒子が起る物理化学的反應を確かめ、どのような対策が有効かを考えることである。このマニュアル素案にはこのような視点がどこにも示されていない。防止対策のまこととして「発生源対策を中心に実施することが望ましい」としてはいる。ところが各



赤土流出防止のための抜本対策に疑問があがっている本土規格の沈砂池

省庁が出してきたのは、発生源対策はひとつとして示さず、赤土流出後に川などで止めようとする。環境庁が得たマニュアルを作るといふ。環境庁が主催し、農林省、建設省、林野庁それに沖縄総合事務局、沖縄県も加わっている。それだけに抜本的な対策が検討されるものと期待して傍聴したが、素案のひと言に過ぎた。



め、洪水の原因になる。それを未然に防ぐ池やダムであって、赤土の流出対策にはほとんど効果がない。

なせ効果がないのだろうか。

水に溶けた赤土の粒は小さく、動いている水の中では沈殿しないからである。それが海に入ると海水の中のニガリと反応して沈殿してしまう。雨の日の川口を観察するといふ。赤い川が赤い海になり、途中から青い海に変わる。豆乳にニガリを入れたら沈殿する。豆乳をつくるのと、同じような反応が起っているのだ。煙の表土が流れ、煙は煙(や)せ、海底に沈殿した赤土は、台風などの波で巻き上げられ広がる。それがサンゴをはじめ海の生態系を乱し続けている。

発生源対策が望ましい

マニュアル素案は有害無用

先に書いたように赤土の粒は動いている水の中では沈殿しない、という厄介な性質を持っている。だからこそ、発生源対策しなければならない。環境庁はマニュアル作成をリードする立場にある。有効な発生源対策にキチンとまどめ直して欲しい。

煙の発生源対策として「溜め池」を作ることを提案する。本土並みの十層程度の小さな沈砂池ではなく、雨水も滲分も赤土も細から流出させない大きな「溜め池」。久米島や南部で見かけた甘からの知恵。沈砂池などとは全く異なる池に作り直すこと。それは自然条件が違ふ沖縄で畑に「本土並」を適用し続けている国の責任だろう。

(建築家)

い二次的対策だけである。環境庁はそれらをまことめたいと見做された。各省庁毎にみてみよう。農林省は砂を沈める「沈砂池」、建設省は砂の流出を防ぐ「砂防ダム」。林野庁は、川の上流に治山ダム。これらは河川流域が長い本土の河川の洪水対策としては有効である。砂が流れると川の途中で堆積し、流れをせき止

美術館は

どうなるんだろう

真喜志 勉

ヒトはアル・ハイマーや記憶喪失にでもならない限り、すべてを忘れることはできない。ボクのヘタ頭にしまい込んだ文化欄のファイルをめくっているが、一時期盛んに出していた「沖縄県立現代美術館」という字句が見当たらない。「ヘリポート・シェフ・沖」「全県FTC」などの大見出しが躍っているのだから。

× ×
沖縄の行政に明るい某ロビイスト()が「今、県は重大な



政治的難問に直面して、美術館問題は凍結のこと」とボクの耳にヒンヒンした。耳順には数年あるがボクは地団駄(じだんだ)踏んで喜んだ。これまでも急いで美術館をお建て、絵描き辞めてお茶するつもりで、「一言い続けたヒトなので凍結と聞いて喜んだのである。しかし、その喜びも長くは続かなかった。

日曜の庭掃除を終え、ポストをのぞくと、新聞と茶封筒が出てきた。ボンヤリ頭で朝刊をながめ、今夜はぐっすり眠ろうか...

スケジュールの見直しを

「作品収集委員」の要請に戸惑い

と考えると茶封筒を開くと何と沖縄県知事・大田昌秀という文字が目に入し、一瞬、

が、さらに目を通すと目を皿のようにするようなことが書いてあった。何が書いてあったのか、知りたいと思う読者も一人や二人はいると思われるので急いで書きます。

大田昌秀県知事がボクに、沖縄県立現代美術館の美術作品収集委員になってもらえないかしらうと、お願いしているのだから、いくら何でも、これは悪い冗談だ。マイケル・ジョーダンでもここまで冗談は言わねえだろう。ボクはキツネを食ったような錯覚に陥った。

県の文化振興課に電話し、何かの間違いではないかと言った。「いえ間違いありません」と言えはるで、県は間違っていたことは致しませんが、と言っているように聞こえた。県民の基地のないう静かな暮らしをした」というソボクな声の、国・中央の事情だけが優先される昨今の沖縄は、間違っているのではないだろうか。全県民を二分するような騒然とした今日、「美術館」を当初の計画通り進めるといふのは間違っていないのだろうか。とボクなりに考えたのである。

「そうか、そうか、やっとなんて食いつめのお好みめボクの眼力が認知され、官費でもってヤタクなお買い物ができるんじや、このわりのしょうがねえじゃねーか」とと長屋の熊と化したのである。早い話野を見た。

× ×
県民ギャラリーで第一回の委員会が開かれた。「この委員会の人選、たれが決めたの...」と県文化振興課の人に質問した

ボクは美術館建設にイチヤモンばかりつけてるので、いよいよお白州へ引かれるのかな...と思った。

(画家)

昨年一月、環境保
健部は「環境正等防正
条例」の施行後五年間の
経過調査を発表した。そ
れによると、赤土の年間
流出量前は条例施行後
四割に減少し、土地改良
事業が中心になり、大幅な
改善が認められるものの、
既存農地からの流出割合
が、割合に伸びている。
「まだ三割に達する」

しかし、毎日毎に接し
て環境を見てゐる者にと
つて算をかけたくなる
ような報告が出されてい
る。国の財政本定による
近年の公共事業費の削減
で数年前と比べると土地
改良事業の工事数、工事
規模とも縮小され、当然
赤土の流出量も減少し
ている。それを単に改



訪 和義

道入路既なく北の谷の
126°

相に降る雨を土砂と一
緒に傾斜に下方に流す本
土並み砂防多々の基準で
設計された砂防でも赤土
を止めよとの無理な試
みは、単に大きな砂防地



和義



を造るだけでは噴昇があることに気がつきだすまいか。

側溝より盛りの土が傾斜している畑は、雨のたびに畑の表土と肥料と農薬が側溝に流れ、水砂池の代用として多く

の割合、谷や沢に垂れ流
つた水は、その方が現状た
りな。

このように多額の土地
改墾工事が終わって、農繁
に引き渡された瞬間から
既存農地の仲間入りをと
る。その意味では、既存

にまだ

よ。県環境保健部の報告は本末転倒であり、民間人や農家への責任転換ではない。

この条例が制定される前に水産側が県環境保健部に申し入れたのは、①現在赤土が流

続く赤土汚

か、出来上がった条例は頼りにならず、断続的に赤土汚染は続いている。条例が施行されて今年は見直しの年であり、ぜひとも条例や工事方法などの検証が必要である。

思う。
なほ、本シンボシム
において、県の土木建築
部や環境保健部には、再
三の要請にもかかわらず
「忙しいから」との断
り理由で参加希望を貰
えぬと強く苦みたい。現
在、赤土汚染の現状や案
例施行後の状況は、イン
ターネットでご覧でき
ます。

<http://www.rik.ne.jp/~Kangyo/Welcome.html>

二、沖繩市漁協理事一役
(沖繩市海邦町一〇)

赤土の浜 十七日
午後二時から県水産会
館五階ホールで開かれ
ます。

いまだ続く赤土汚染

防止条例の効果に疑問

農地からの流出割合が十割近くに伸びているとの報告は、なるほど納得もいくものである。

それを「個人開発と無関係な無対策の事業があるため、個人レベルでの条例の周知徹底が必要」

れたい。既存農地に対応し得る条例の現在工事中の現場に対応し得る条例③今後の工事現場に対応し得る条例一の三点もあった。

県環境保健部もその旨約束したはずだった。

そのための赤土シンボ
シウムが水産業中央会
主催で開催されます。
より多くの方々の参加
を得て今後のありようを
考えていきたいと思います。
そして貴重な意見なども
お聞かせいただきたい。

日曜平論

なぜ細川に腰を差している
でしかと聞かれると、返事をす
るのに一寸と躊躇。公常が
日本一びどりの現物に纏う、
さらに東南アジアに出とゆくの
にも便利だからと、この公正直
な意だが、軍事基地があるの
は知っているが公常までは気づ
かなかつた本土ではよく言わ
れる。その軍事基地がまた大き
な公常の発生源であり、それに
加えて水や大気汚染が一般に
もひろがっている。現物は素外知
られてはいない。

沖縄に居てゐる、軍事基地の
環境汚染については、フナツク
ボツクスといふことで、中味が
おつぱりかたらない。先化とい
ふなと初めて聞くものがなま
まじつてゐるしもあるのだ
きやうは先手を打つて隠れてお
かなくて居つた方がいいぞ。

恩納遺傳所のように遠慮されて
から汚染の存在に気がつくこ
とが止ることを防ぐのが責任の
なごいまわしをめぐり、いかに
に軍用地転用法の期限が来るの
ではなかったものではない。十
五年前から十分亭より多くを



宇井 ぞと立ちかわれば、日本
政府は少しも動かないとは、
これまでの深刻な公書の経験に
身にしみてゐる。

萬天間基地の移転について、今のところまぎ指針で表現される願望だけで議論されているが、クリコプターの回転

米軍基地公害の中身

翼から生ずる低周波振動についてはまだ全く知られていない。この問題は、この二十年余うちで鋭くわかれてきたもので、毎秒数回から数十回の耳には聞けない空気の振動によって、頭痛やイライラ感、不安、嘔りなどの症状が生ずるものだが、個人差が大きく、いわゆる「低周波公害」に入っていないために規制の対象になっていない。しかし、人体の動きは、毎秒約一回の心臓の拍動をはじめ、十数回から数十回の脈波など、この範囲の周波数で動くものが多いとあるので、低周波振動に生理作用があることも事実はない。東京の予知は、旧年米本騒音になったバケットモーター騒動から、この周波数の光の脈波が網に作用したらしい。すでに伊丹空港などの航空機騒音の被害におい

でも、大型機の導入によって低周波振動の影響が増えていると云ふ、和歌山の朝美、汐見立、随分三つに明らかになっている。

一昨年十一月に開かれた日本環境会議泊純夫会でも、この問題について汐見博士から詳しい報告があり、和歌山の環境保全室に対しては低周波振動を調査するよう申し入れたのだが、現在までのところ回答がない。先日結審した騒音訴訟に関する和歌山の調査でも、この問題が測定対象として取り上げられた様子はない。これまでも新しい公害が行政に認められるのは時間がかかり、その間に被害が広がるといふ状況を繰り返してきただが、低周波公害も例外ではない。基礎学術の議論をする前に、今ある諸地がどのような被害

書を出しているかを正確に
つかむことが、県民の委託を受
けた行政がすべき仕事である
こと。

この沖洲大会でも、一掃掃
かれたのは、米国では基礎があ
るいであまり押制されていな
かったロビが、あつちの基
地で見出れるようになった。魚
に驚愕するところ、人知に影響
した方々、世評を言ふから騒
いだために日本の方が厳しく規
制されているが、米軍はあまり
気にしていない。カリフ
ォルニアのところに基地でも高
濃度のロビ汚染が発見され
て、その除去には相当な時間と
費用がかかることが知られて
いる。沖洲の基地でもロビは
かなりあると見えて、日本がそ
ろでである。真正の積極的な
取組みが求められる。

沖縄環境ネットワーク 1997年度の主な活動

1997年

- 4月26日 第1回 勉強会 テーマ「環境基本条例」講師 淡路 剛久 氏（立教大学 教授）
 6月21日 第2回 勉強会 テーマ「雨水利用」講師 村瀬 誠 氏（東京都墨田区役所職員）
 6月23～27日 国連環境開発特別総会 に 砂川 かおりさんを 派遣
 （第16回日本環境会議沖縄大会予算内の事業）
 8月6日 世話人会で「沖縄県環境基本条例制定にあたっての公開意見書」を沖縄県に提出
 10月25日 「地球温暖化とサンゴ礁」 地球温暖化を防ぐ全国縦断シンポジウム
 NGO 気候フォーラムと共催
 12月4日 世話会有志で「海上ヘリポート基本案についての公開討論 及び 環境アセスメント調査の早期実施を求める申し入れ書」を防衛施設庁及び沖縄県に提出

1998年

- 1月28日 第4回おきなわ環境交流集会 パネリストとして参加
 2月14日 生物環境についての講演会「見過ごされている那覇市の自然」
 講師 藤井 晴彦（沖縄県公衆衛生協会・理学博士） 那覇市と共催

沖縄環境ネットワーク1997年収支状況

◎収入の部

A. 1997 年度会費	¥ 579,000
団体会員 5 団体	
個人会員 173 人	
学生会員 4 人	
B. 寄付金	¥ 15,010
8 人	

収入合計 ¥ 594,010

*5月の世話人会で、会計監査に関する方法を決定した上で、会計監査終了後、次号に最終の会計報告を掲載いたします。

◎支出の部

A 事務局経費	¥ 321,697
・印刷費（ニュースレター印刷）	¥ 86,156
・郵便代	¥ 184,420
・文具代	¥ 33,711
・会費振込手数料持ち出し分	¥ 7,410
・吉嶺全二 氏 葬儀お花代	¥ 10,000
B. 事業費	¥ 81,700
第2回 勉強会 講師 旅費	¥ 81,700

支出合計 ¥ 403,397

収支差

¥ 190,613

～にへーで一びる(ありがとうございます)～

◆1998年3月までに新しく寄付をいただいた方々（敬称略）◆

小関 壽郎／山内 るり／一瀬 敬一郎／岩永 正敏／北野 正夫／北野 博一／吉田 忠雄
 高見澤 和夫／北山 郁子／北山 敏和／津留 佐和子／片岡 兼松
 平田 幸四郎／岡安 茂祐

◆沖縄クリーンビーチクラブ

海浜清掃

日時：4月19日 午前10時から

場所：読谷村 久良波ビーチ

日時：5月17日 午前10時から

場所：久高島 久高ビーチ

日時：6月21日 午前10時から

場所：読谷村 宇座ビーチ

日時：7月19日 午前10時から

場所：恩納村 瀬名波ガマ ビーチ

[問い合わせ先]

Tel.098-964-2517 エド・サンチェス

Tel.098-965-4279 ケニー・イーマン

基調講演 講演者：T.G. デラセンテ 博士
(国連大学高等研究所所長)

テーマ：「環境教育と情報ネットワーク」

日時：6月19日 午後1時～5時

基調講演 講演者：山路 敬三 博士
(日本テトラパック会長)

テーマ：「企業とゼロエミッション」

[問い合わせ先]

Tel/Fax 098-898-5411 事務局

◆ラジオ番組「美しい地球を子どもたちに・

アジェンダ 21 おきなわ」(環境教育番組)

ラジオ沖縄 毎週日曜日 午前7時30～8時

パーソナリティ：渡久地 澄子&

伊波 美智子 4月12日 スタート!

◆沖縄海洋文化と自然環境アクション

ネットワーク

(Okinawa Ocean Culture and Environment
Action Network[沖縄 O.C.E.A.N])

今年は国際海洋年にあたり、国連では海洋憲章への署名を呼びかけ、広く海洋保全に対する啓発を進めている。沖縄海洋文化と自然環境アクションネットワークでは、国連の海洋憲章署名の呼びかけを通して、沖縄の海の保全と文化と海の繋がりをアピールすると共に、10月までに1万人の署名を集めようと活動している。集められた署名は、沖縄の代表的な画家、名嘉 睦稔 さんの海の絵と共に、国連へ送り、沖縄の海・自然・文化とそれを守っていく人々を国際的に強くアピールする予定である。子どもから大人まで多くの方々のご協力をお願いします。

[問い合わせ先]

Tel.098-964-2517 エド・サンチェス

◆森と水の会：

普天間飛行場跡地利用を考える市民の会

・講演会&総会

日時：5月20日 午後6時30分～8時30分

場所：宜野湾セミナーハウス

講演者：新垣義雄 氏 (普天間神社宮司)

テーマ：「宜野湾市の洞くつと水」

・ゼロエミッション フォーラム '98

場所：沖縄コンベンションホール大会議場

日時：6月18日 午後1時～5時

◆沖縄リサイクル市民の会

・フリーマーケット開催

日時：毎月 第4日曜日 (4/26・5/24・6/28・

7/26) 午前10時～午後1時

場所：パレットくもじ 2F Pデッキ

出店希望者は1ヶ月前に要予約

[問い合わせ先] Tel/Fax 098-886-3001

E-mail : ktomo@ryucom.ne.jp

◆安謝川をきれいにする首里住民の会

・安謝川クリーン大作戦

活動日時：毎月第4土曜日 (4/25・5/23・6/27・
7/25) 午前10時～12時

集合場所：末吉公園内 花見橋

軽装、ゴム長靴を用意してご参加ください。

・第4回 安謝川をきれいにする

首里住民の会 総会

日時：4月18日 午後2時～4時

場所：石嶺スポーツプラザ 2F ホール

総会後、懇親会あり。参加費 500円

[問い合わせ先]

Tel/Fax 098-884-1915 石野 桂子

◆源河川にアユを呼び戻す会

・第5回アユのぼり祭り (雨天決行)

日時：4月25・26日 午前10時～

場所：源河公民館前広場

[問い合わせ先]

Tel 0980-58-2414 源河公民館

- ・アユの放流とピアノコンサート
日時：5月22日 午後（予定）
場所：源河川中流域 歌碑下
[問い合わせ先] Tel 0980-58-2642
琉球アユ種苗センター内（担当/瀬良垣）

◆大里の自然を守る会

- ・大里村のコーラル採掘に関する裁判
日時：4月21日 午前10時～
場所：那覇地方裁判所 101 法廷
[問い合わせ先] Tel 098-945-9297 兼浜 昇

◆沖縄・山ばる・海

- ・ヤンバル林道・赤土流出訴訟
日時：5月27日 午前10時～
場所：那覇地方裁判所 101 法廷
[問い合わせ先] Tel 098-887-5517 事務局

◆LOVE ジュゴン・ネットワーク

- ・海岸清掃と海中のオニヒトデ 駆除
日時：5月9日 午前10時～午後2時半
集合場所：辺野古漁港
参加費：500円 但し、ボートに乗船する場合は 余分にかかります。お弁当持参。
- ・サンゴの産卵を見る会
日時：5月中旬 満月の日から3日前後の間
午後6時～9時
場所：中南部の海岸。詳しい場所は未定。
参加希望の方はお問い合わせ下さい。
- ・～只今、会員募集中！～
1997年の11月25日に結成。琉球列島（南西諸島）に棲息するジュゴンの保護と、棲息海域や周辺陸域の自然環境の保全活動を目的とし、活動を行なっている。

[問い合わせ先] Tel 098-897-2234
Fax 098-897-2240

ダイビングショップ・マリンガール 内
事務局長 棚原 盛秀

◆沖縄環境ネットワーク

- 沖縄環境ネットワークでは、毎月1回、世話人会を開いています。
- ・世話人会
日時：5月7日 午後7時～
6月4日 午後7時～
場所：沖縄大学科学実験室

- ・随時、会員を募集
年会費
学生会員：1,000円
個人会員：3,000円
団体会員：10,000円

郵便振込先：

（口座番号）021010-9-20132
（加入者名）沖縄環境ネットワーク

*1998年度 会費納入がまだの方は、早めに、お近くの郵便局より、会費の納入をお願いします。

編集後記

ニュースレターの記事を編集していると、この小さな島々に、よくもこれだけの問題が山積していることに改めて驚かされる。今回のニュースレター作成にあたっての反省点は、沖縄島の以外の島々のニュースが少ないこと。情報が沖縄島を中心に発信されていることは、情報を通して、中心と周辺の関係を作り出し、ネットワークとしての目的や性質から離れていく傾向にあると危惧している。ということで、次号では島々の特集をやりたいなど考えていますので、北は奄美から、南は波照間島まで、会員の方々は、それぞれの取り組みや近況報告を送って下さいね。

（砂川）

*環境情報募集中！沖縄環境ネットワーク事務局までお寄せ下さい。

沖縄環境ネットワーク通信・第5号

「おきなわ環境ネット（仮称）」

1998年4月9日発行

発行 〒902-8521

那覇市国場 555 番地 沖縄大学

宇井研究室 内 沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-854-2962

（宇井研究室）

E-mail : ui@mail.okinawa-u.ac.jp

発行人 宇井 純

編集人 砂川 かおり・高橋 宏明・
後藤 哲志